

県営農村活性化住環境整備事業地内
(八女西部地区)

埋 蔵 文 化 財 調 査 概 報 IV

福岡県八女市大字立野^{やめし}所在遺跡^{たての}の調査報告

八女市文化財調査報告書 第48集



1997

八女市教育委員会

序

福岡県南部地域におきましては、現在各地で農業基盤整備事業が着々と進んでおり、本市においても東部地区、西部地区の2地区にて、大規模な圃場整備が行われているところです。

このような中、平成5年度より開始された県営農村活性化住環境整備事業（八女西部地区）地内では、これまで数多くの遺跡を調査してまいりました。

文化財の保護と活用にも力を注いでいる本市としては、失われゆく遺跡に対し、発掘調査という“記録上での保存”を緊急に、且つ、慎重に行っております。

本書は、八女市大字立野地区において、平成8年4月より平成9年1月にかけて実施しました埋蔵文化財の緊急発掘調査の記録です。

今回の調査では、九州地区において2例目の発見となった円形の二重環濠が見つかるなど、これまでほとんど知られる事のなかった、当地域での先人達の生活や生き様を垣間見る事が出来た事で、八女の歴史に新たな一頁を加える事が出来るなど、貴重な成果があがっています。

なお、発掘調査を行うにあたり、福岡県筑後川水系農地開発事務所、八女西部土地改良区、地元町内会の方々には、多大なる御配慮と御協力を賜りました事に感謝の意を表しますとともに、概報という形ではありますが、本報告が今後の文化財の普及活用の一助となる事を深く願ってやみません。

平成9年3月31日

八女市教育委員会

教育長 樋口 欽一

例 言

1. 本書は八女市が国、県の補助を受けて実施している県営農村活性化住環境整備事業（八女西部地区）に伴う発掘調査の調査概報である。
2. 発掘調査は八女市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測は国土地理院の設定する第Ⅱ座標系を基準として行った。なお、本書に使用した方位は全て磁北である。
4. 調査現場での遺構実測は参加者で行い、写真は大塚が撮影した。
5. 出土遺物の整理は、岩戸山歴史資料館において行った。なお、本書の執筆、編集は大塚が行った。

本 分 目 次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査概要	6
1. 竪穴住居（SB）	6
2. 掘立柱建物（SB）	8
3. 土塋（SK）	14
4. 溝（SD）	19
5. 環濠（SD）	20
IV. まとめ	22

I. はじめに

平成5年度より始まり、本年度で最終年度を迎える県営農村活性化住環境整備事業は、八女市大字立野地区を中心とした約1.7haを事業計画地とし、平成8年3月11日付で埋蔵文化財発掘調査の通知が提出された。これに先立ち、平成7年11月に当該地において確認調査を行い、事業地内における埋蔵文化財包蔵地の推定を行った。確認調査の結果を踏まえた上で、八女市、福岡県教育委員会、八女西部土地改良区、福岡県筑後川水系農地開発事務所と協議を重ねながら、事業地内において掘削や削平を受ける部分について発掘調査を実施する事とした。

発掘調査は平成7年4月4日より開始し、途中、記録的な猛暑に見舞われながらも、平成9年1月31日に全ての現地調査を終了した。

調査関係者は次の通りである。

八女市教育委員会

教 育 長	樋口 欽一
教 育 長	小川 勲 (平成9年2月まで)
生涯学習課長	杉山 信行
生涯学習課長補佐	
兼文化財係主任	下川 文比古
文 化 財 係 長	赤崎 敏男
同 係 員	中川 寿賀子
同 係 員	大塚 恵治 (調査担当)
同 嘱 託	山田 朗子

八女西部土地改良区

理 事 長	牛島 勝
事 務 局 長	浅川 光
事 務 局 員	松延 容子

福岡県筑後川水系農地開発事務所

工事第三課 課長	古賀 昭則
同 課 長 補 佐	
兼 第 一 係 長	小川 博道
同 係 員	大淵 洋信
同 係 員	岡 昌弘

同 係 員 小牧 慶一

同 係 員 高井 宏 (八女西部担当)

なお、本調査にあたり、地元町内会の方々をはじめとする関係者各位には、多大なる御配慮と援助をお受けした。記して感謝の意を表します。

Ⅱ. 位置と環境

八女市は福岡県の南部に位置し、西に筑後市、東に上陽町・黒木町、北に広川町、南に立花町と、一市四町と境を接している。

八女市内には国道442号線が東西に走り、又、九州地区の大動脈ともいえる九州縦貫自動車道や国道3号線が南北に貫くなど、八女地方の交通の要衝となっている。現在広川町にある広川サービスエリア付近においてインターチェンジ建設工事が急ピッチで進められるなど、八女市周辺の交通需要は今後更に増してゆく事が予想されている。

八女市内において生産されている農産物は米・麦などの他に、電照菊やお茶の栽培も盛んで、特にお茶は「八女茶」というブランド名で宮内庁に献上するなど、全国にその名を馳せている。

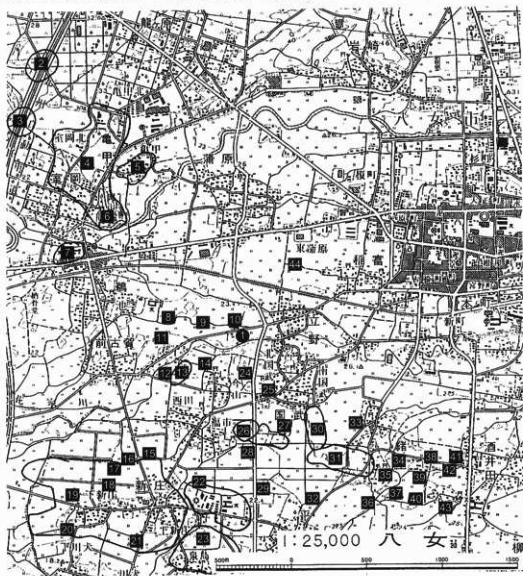
また、伝統工芸も賑わいを見せており、八女東端部から黒木町においては阿蘇山の火砕流によって形成された阿蘇溶結凝灰岩で作られる石灯笼などがあり、中・南部においては八女福島仏壇や八女の地の利を生かした「筑後手すき和紙」(註1)の生産が盛んに行われ、その他においても八女和ごまや八女竹細工、八女矢などの工芸品が作られている。

「八女」の名が文献上、歴史の表舞台に登場するのは、今から約1300年前に編纂された日本書紀・景行天皇の条からであるが、市内にはそれ以前の遺跡も数多く存在し、その多くは中部・南西部に集中している。竪穴住居や石組炉を検出し、獣形勾玉が出土したアモメ遺跡(註2)は縄文時代後期の集落跡として縄文時代を代表している。弥生時代では、亀ノ甲式土器と呼ばれた刻目尖蒂文系土器が出土した亀ノ甲遺跡(註3)、甕棺墓群より方格規矩鏡(3号甕棺)、鉄戈(3号甕棺)、深樋式銅剣(5号甕棺)などが出土した茶ノ木ノ本遺跡(註4)、全長45m、幅25mにおよぶ前方後方形の溝を検出した中里遺跡(註5)などの他に六反田遺跡(註6)、室岡工業団地内遺跡(註7)などの集落・墳墓群が挙げられる。古墳時代に入ると、4世紀前半の居館跡と思われる溝が検出された深田遺跡(註8)などの他に、耳納山地の南端部斜面より派生し、市の北東部から西方に延び、末端部は三潁郡三潁町に到る総延長十数kmにもおよぶ八女丘陵と呼ばれる中～高位の台地が存在する。丘陵上には、筑紫君磐井の墳墓に比定されている岩戸山古墳(註9)を代表として、石入山古墳(註10)(筑後市・広川町)、弘化谷古墳(註11)(広川町)、乗場古墳(註12)、善蔵塚古墳(八女市・広川町)、丸山塚古墳、鶴見山古墳、童男山古墳(註13)等が点在し、装飾古墳も数多い。この頃には、三助山、牛焼谷、塚ノ谷(註14)、中尾谷(註15)等の八女古窯跡群(須恵器窯)や立山山古窯跡(埴輪窯)(註12)なども操業を開始しており、各地に須恵器や埴輪の供給が行われていた。

今回報告を行う立野・大坪遺跡は、八女市と立花町の境を東西に流れる矢部川によって形成された実り豊かな沖積地上に位置している。標高は現在の水田耕作面で23m前後で、周辺の

標高と大差はないが、古地図よりの復原では現標高よりも1~2m程高い微高地であった事が伺われる。

遺跡の南側には、江戸時代に一部掘削されたと伝えられている矢部川の支流である花宗川が東西に流れている。この川を挟んだ対岸には弥生時代後期の集落跡が見つかっており、本遺跡周辺は弥生時代全般を通じて、集落等の形成が可能な状態であった事がわかる。

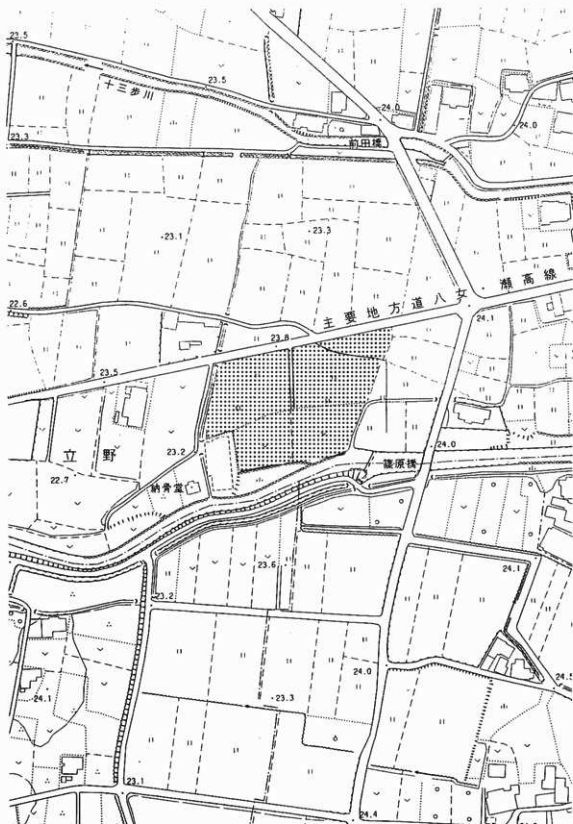


- | | | | | |
|-------------|--------------|-------------|-------------|-----------|
| 1. 立野・大坪遺跡 | 10. 立野・六反田遺跡 | 19. ヒヤケ遺跡 | 28. 中里遺跡 | 37. 水荒遺跡 |
| 2. 西中沢遺跡 | 11. 五反田遺跡 | 20. 六反田遺跡 | 29. 上島町遺跡 | 38. 深田遺跡 |
| 3. 坊野遺跡 | 12. 川原遺跡 | 21. 新庄遺跡群 | 30. 前田・大坪遺跡 | 39. 二反田遺跡 |
| 4. 室岡遺跡群 | 13. 井手田遺跡 | 22. 大石本遺跡 | 31. 打越遺跡 | 40. 宮ノ前遺跡 |
| 5. 亀ノ甲東原遺跡 | 14. 井手口遺跡 | 23. 泉島遺跡 | 32. 新替遺跡 | 41. 京田遺跡 |
| 6. 岡山公園古墳 | 15. 西田前遺跡 | 24. 篠原遺跡 | 33. 神田遺跡 | 42. 京田遺跡 |
| 7. 岡山小学校庭遺跡 | 16. 水町遺跡 | 25. 松本遺跡 | 34. 野田遺跡 | 43. 石町遺跡 |
| 8. 樋の口遺跡 2次 | 17. 吉香田遺跡 | 26. 前田・大坪遺跡 | 35. 緒玉天満宮遺跡 | 44. 一平遺跡 |
| 9. 土六遺跡 | 18. 宮ノ后遺跡 | 27. 国武遺跡 | 36. 猪町遺跡 | |

第1図 立野・大坪遺跡調査地点位置図と周辺の遺跡 [1/25,000]

〈参考文献〉

1. 県指定無形文化財（昭和47年11月18日指定）
2. 「埋蔵文化財調査概報4」八女市文化財調査報告書 第29集
3. 「亀ノ甲遺跡」福岡県八女市室岡の弥生遺跡調査概報
福岡県八女市教育委員会（1963年）
4. 「埋蔵文化財調査概報5」八女市文化財調査報告書 第34集
5. 「八女市南部地区県営團場整備事業地内 埋蔵文化財調査概報」
八女市文化財調査報告書 第18集
6. 同註5
7. 「室岡工業団地内遺跡」八女市文化財調査報告書 第31集
8. 「埋蔵文化財調査概報3」八女市文化財調査報告書 第23集
9. 「岩戸山古墳」環境整備事業に伴う基礎的調査の報告 八女市教育委員会（1972年）
10. 「筑後一條石人山古墳」鏡山・武藤（昭和12年）
史跡名勝天然記念物調査報告書 第12輯
11. 「弘化谷古墳」広川町文化財調査報告書 第8集
12. 「立山山窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅳ・総集篇 八女市教育委員会（1972年）
13. 「童男山古墳」八女市文化財調査報告書 第16集
14. 「塚ノ谷窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅰ（1969年）
15. 「中尾谷窯跡群」八女古窯跡群調査報告Ⅱ（1970年）



第2図 立野・大坪遺跡調査位置図 [1/25,000]

Ⅲ. 調査概要

平成7年10月下旬、平成8年度県営農村活性化住環境整備事業予定地内において、確認調査を行い、溝や柱穴等、多数の遺構を検出した。又、この弥生時代中期に該当する土器を多数包蔵する溝も検出しており、当該地内に弥生時代の環濠の存在を示唆しているものと思われた。福岡県筑後川水系農地開発事務所、八女西部土地改良区との三者協議の中で、平成8年4月より始める本調査について確認を行い、平成8年3月11日付（七筑開一第196号）で発掘の通知が提出された。通知について文化庁長官宛進達を行った後、八女市教育委員会より、平成8年4月8日付（八教生文第65号）にて、発掘の通知を文化庁長官宛進達を行った。

平成8年4月より、現地に於いて調査を開始した。当初、殆ど予想もしていなかった二重環濠の存在が明らかになり、現状での埋め戻し保存等の処置を講ずる必要性が出て来た為、施工業者も含めた四者協議を幾度となく重ね、最終的に埋め戻し保存が決定した。三者協議時において念頭に置いていなかった保存問題が浮上した事で、若干、当初の予定終了時期が遅れ気味になるなど反省すべき点も幾つかあったものの、平成9年1月31日において、全ての現地調査を終了した。

当調査区においては、堅穴住居、掘立柱建物、土壌、溝、環濠などを検出しているが、今回の報告中では、その主要な遺構について、以下言及する。

1. 堅穴住居（SB）

弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居を12軒検出した。弥生時代前期に属する円形プランのものは、環濠や溝に切られる形で、調査区の北東に集中している。以降の住居は弥生時代後期から古墳時代前期に集中しており、前述の住居群とは、時間的な隔たりが大きく、集落的なつながりは認められない。プランは隅丸方形、正方形、長方形であり、基本的に主柱は4本であるが、1本柱や6本柱のものも認められる。調査区内に散在する感はあるが、SB-04を除くと全て調査区南側にあり、当遺跡に隣接する篠原遺跡との関連が興味深いところである。

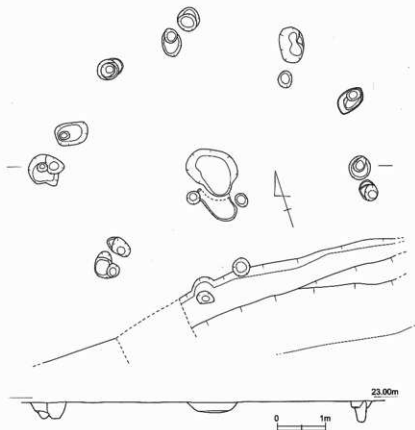
〈SB-01〉

調査区北東部において検出した、円形の堅穴住居である。削平の為、住居壁面は観察出来なかったが、主柱穴と思われる13の柱穴を確認した。柱穴の深さは0.3～0.5mを測る。柱穴は並立しているものが多数あり、少なくとも1回は建替を行っているものと考えられる。住居中央に炉跡と思われる土壌があり、この土壌を挟んで相対する柱穴の間隔は6.0～6.4mを測るところから、この住居は直径8mを越える大型の堅穴住居であったと思われる。弥生時代前期中頃と思われる。

〈SB-03〉

調査区北東部に検出した、円形の堅穴住居である。直径が10.4mあり、当遺跡内では最大

の規模を誇る。現存する柱穴は5つで、他はSD-10（外濠）によって切られ消失している。中央に炉があり、住居内土壌を併せ持つ。炉内埋土中より出土した如意形口縁を持つ甕形土器が、板付Ⅱ式古段階に相当するところから、弥生時代前期中頃のものと思われる。



〈SB-09〉

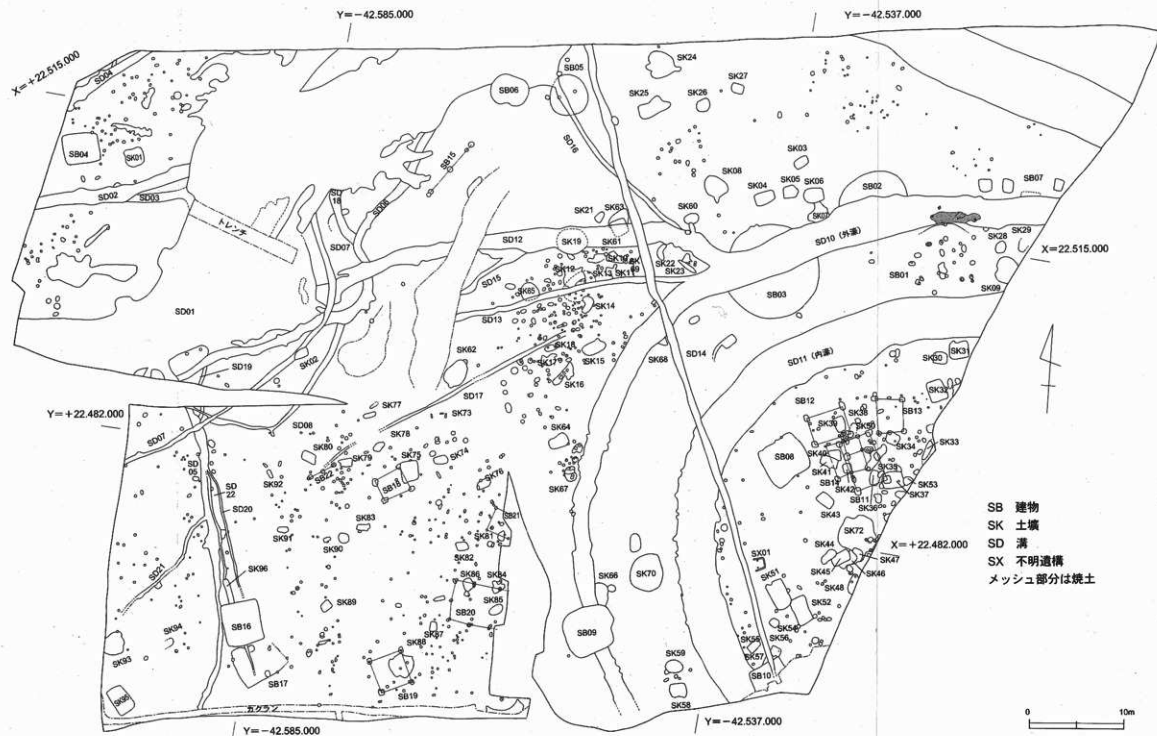
調査区中央部南側で検出した、隅丸方形の堅穴住居である。長軸を東北東にとり、長軸長5.7m、短軸長5.1m、深さ0.1mを測る。屋内土壌

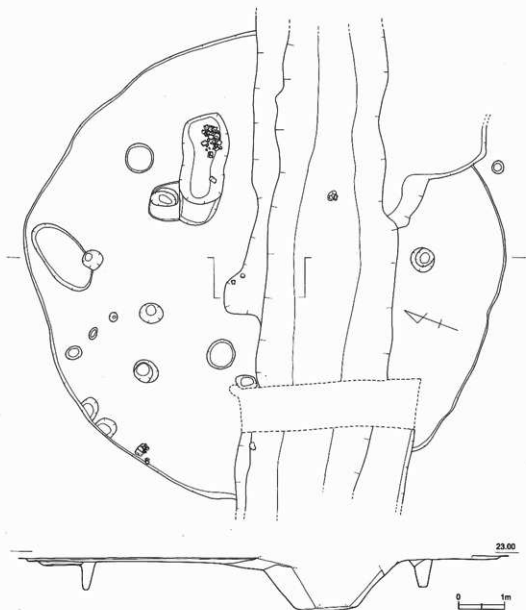
第3図 SB-01 [1/80]

と思われるものはあるが、炉跡は検出出来なかった。4本柱と思われるが、2本分の柱穴しか確認出来なかった。SD-10（外濠）を切っている。弥生時代後期か。

〈SB-16〉

調査区南東部で検出した、正方形に近い長方形の堅穴住居である。長軸を北北西にとり、長軸長4.7m、短軸長4.2m、深さ0.1m前後を測る。北辺を残し3辺にベット状遺構が認められる。矢部川左岸に展開する弥生時代後期から古墳時代前期までの堅穴住居には、ベット状遺構がほぼ全周する類例も多く見られることから、本来は全周していたものと思われる。中央に屋内土壌を検出したが、炉跡は確認出来なかった。柱穴を6つ検出したが、コーナーにある4本柱が主柱穴で、中央のやや浅い2つの柱穴は、支柱であったと思われる。SD-05とSD-22を切っている。圧沈があった為か、黄色粘質土でSD-22部分を覆っている。

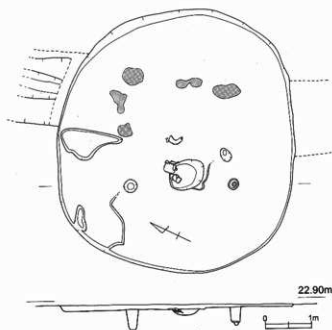




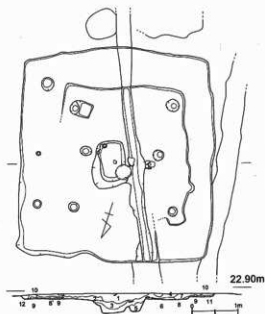
第5図 SB-03 [1/80]

2. 掘立柱建物

弥生時代を中心として、時期の不明確なものまで含め、10棟の掘立柱建物を検出した。長方形プラン、正方形プランが主流であるが、柱穴が柱列状に並ぶものも、これらに含めた。掘立柱建物群は大きく3グループに分別が可能で、1つ(A群)はSD-11(内濠)内の北側に集中する4棟、もう1つ(B群)は調査区中央部から南側に展開する4棟、残る1つ(C群)は柱列状の建物2棟である。A群は密集度が高く、最低二時期が想定できる。B群は4棟がそ



第6図 SB-09 [1/80]



- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1. 黒茶色土 (炭化物含む) | 8. 淡黒茶灰色土 (黄白色土混) |
| 2. # (黒土含む) | 9. 淡灰色土 + 黄白色土 |
| 3. 黒茶色土 + 黄白色土塊 | 10. 淡黒茶灰色土 (黄白色土混) |
| 4. 黒茶色土 + 黄白色土塊 | 11. 黒灰色土 |
| 5. 黒色土 (バサバサ) → SD-22下層埋土 | 12. 淡黒茶灰色土 (中や暗い) |
| 6. 茶灰色土 | |
| 7. 暗黒茶色土 (バサバサ) | |

第7図 SB-16 [1/80]

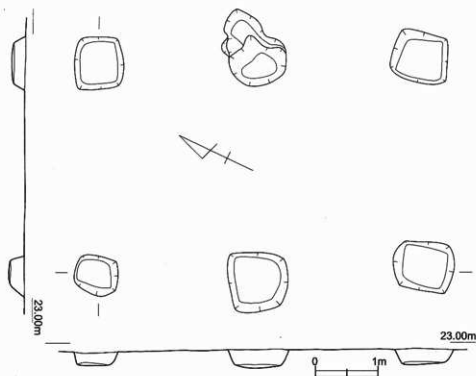
それぞれ離れているが、弥生時代に属すると思われる2棟は、SD-10 (外濠) とほぼ同間隔の位置にある事から、環濠との意味合いが興味深い。

〈SB-11〉

調査区東部のSD-11 (内濠) 内で検出した桁行2間、梁行1間の長方形プランを持つ6本柱の掘立柱建物である。桁行長5.3m、梁行長3.4mを測る。主軸の北西延長部にSB-03が位置している事から、両者の結びつきが予想される。柱穴の平面プランは正~長方形で、残存状況は悪く、柱穴自体は0.3m程の遺存でしかない。SB-14やSK-35、36に切られている。

〈SB-12〉

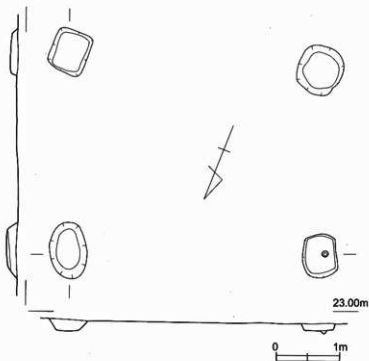
調査区東部のSD-11 (内濠) 内で検出した桁行1間、梁行1間の長方形プランを持つ4本柱の掘立柱建物である。桁行長3.20m、梁行長4.00mを測る。柱穴内より弥生時代前期の土器が出土しているものの、環濠との関係は不明である。柱穴の平面プランは、方形が楕円形で、残存状況は悪く、柱穴自体は0.2m程の遺存でしかない。



第8図 SB-11 [1/60]

〈SB-13〉

調査区東部のSD-11（内濠）内で検出した桁行1間、梁行1間の長方形プランを持つ4本柱の掘立柱建物である。桁行長3.5m、梁行長2.7mを測る。柱穴の平面プランは、楕円形、又は、正方形プランで、残存状態は極めて悪く、柱穴自体は0.2m程の遺存でしかない。



第9図 SB-12 [1/60]

〈SB-14〉

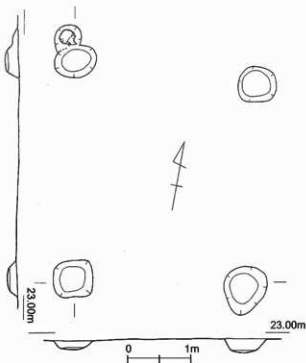
調査区東部のSD-11（内濠）内で検出した桁行2間、梁行2間の正方形プランを持つ総柱の掘立柱建物であったと思われるが、SK-41によって、一穴を失っている。住居中央の桁行方向に、計4つの柱穴が存在する。それぞれの深さは0.4m程あり、支柱として機能していたものと思われる。柱穴の一部が、SB-11を切っているようである。

〈SB-18〉

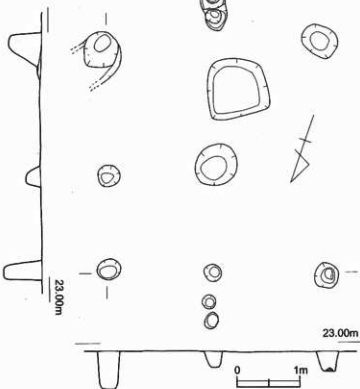
調査区中央部で検出した、桁行1間、梁行1間の長方形プランを持つ4本柱の掘立柱建物である。桁行長2.7m、梁行長2.9mを測る。出土遺物が無い為、明確な時期は不明だが、SK-75に切られている事と、遺構埋土がバサバサの黒色土である事から、弥生時代中期中頃をややさか上るものと思われる。柱穴のプランは基本的に楕円形である。

〈SB-19〉

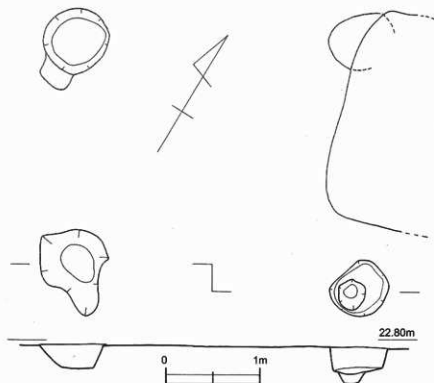
調査区の中央部南側で検出した、桁行1間、梁行1間の正方形プランを持つ、4本柱の掘立柱建物である。桁行長3.5m、梁行長3.6mを測る。出土遺物は無く、時期は明確ではないが、柱穴内埋土がバサバサの黒色土である事から、北側に所在するSB-18とほぼ同時期の所産であると思われる。柱穴のプランは隅丸方形、又は、楕円形で、深さは0.4m前後である。



第10図 SB-13 [1/60]



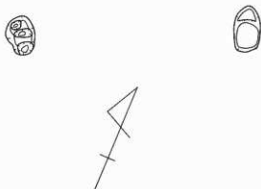
第11図 SB-14 [1/60]



第12図 SB-18 [1/40]

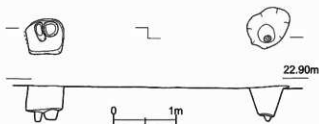
〈SB-20〉

調査区中央部南側で検出した、桁行2間、梁行2間の正方形プランを持つ。8本柱の掘立柱建物を成すと思われるが、一部柱穴が調査区外に延びる為、規模等については判然としない。柱穴より磁器片が出土しており、15世紀以降のものと思われる。柱穴の深さは0.3m～0.5m前後を測る。



〈SB-07〉

調査区北東部で検出した柱列状の遺構である。一辺約1.3m前後、深さ0.3～0.4mを測る規模の土壌を3基検出した。当初、貯蔵穴の一群として捉えていたが、各墳の形態、及び、規

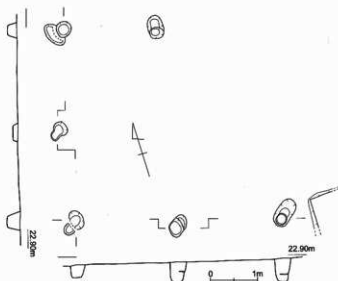


第13図 SB-19 [1/60]

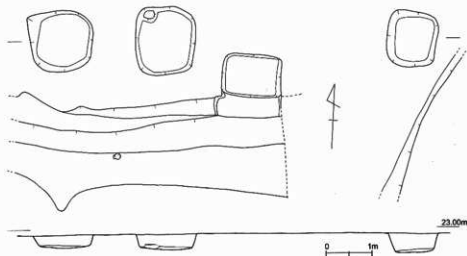
模にほとんど差異が無く、同一軸線上に整然と並ぶ為、ほぼ東西にとる掘立柱建物の一群として捉える事とした。予想される残りの柱穴は調査区外にあり不明。SD-10（外濠）と並立しており、各柱穴ともSD-10（外濠）との距離0.6mを保っている。しかし、柱穴床面に柱圧痕が残っていない事が、やや気になる。

〈SB-15〉

調査区北西部で検出した柱列状の遺構である。柱間は基本的に2間で、外側に位置する柱穴間の距離は7.0mを測る。周辺にこの柱列との連続性を示すものが無く、

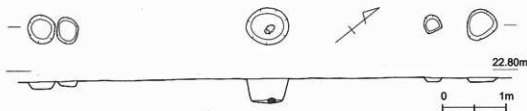


第14図 SB-20 [1/80]



第15図 SB-07 [1/80]

且つ、中心柱穴より各サイドの柱穴との距離が同間隔という事から、やや強引ではあるが、門状遺構として、掘立柱建物の範中でとらえる事とした。



第16図 SB-15 [1/60]

3. 土坑 (SK)

縄文時代から弥生時代にかけて、総数96基の土坑を検出した。貯蔵穴、土坑墓、木蓋土坑墓、木棺墓、甕棺墓、縄文堅穴土坑などが、総数の大半を占めている。弥生時代前期～中期初頭に属する貯蔵穴は、A・B・C3つのグループに分別が可能で、A群は、SD-11（内濠）内に集約されるグループ。B群は、調査区北東のSD-10（外濠）付近に展開するグループ。C群はSD-10（外濠）とSD-12に挟まれた地区の西側に散在するグループである。A群においては、更に3小支群に分別が可能であるが、本稿においては割愛させていただきたい。墓坑群は、主に調査区中央から南側にかけて散在している。弥生時代中期以降のものがほとんどで、環濠を造営した集団とは時期を画している。縄文時代の堅穴土坑は、調査区内に散在しており、一定の規格性は見当たらない。

〈SK-25〉

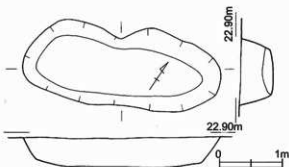
調査区中央部北側で検出した、いわゆるB群内の土坑である。長軸を東西にとり、長軸長3.1m、短軸長1.3m、深さ0.48mを測る。やや舟底形をした長円形のプランを持ち、多量の弥生土器が出土した。貯蔵穴の一例と捉えているが、廃棄土坑としての機能も捨てきれないところである。

〈SK-26〉

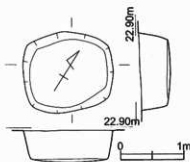
調査区中央部北側で検出した、いわゆるB群内の土坑である。長軸を東西にとり、長軸長1.4m、短軸長1.26m、深さ0.5mを測る。床面のプランはほぼ正方形で、その直上には炭化物の薄い層がびっしり貼りついていて、炭数が遺存していたものと思われる。埋土上層から下層にかけて、多量の弥生土器の出土が見られた為、貯蔵穴としての機能終了と同時に、廃棄坑としての機能が始まったものと考えられる。南西隅側からの土器の流入が非常に多い事も、興味深い点である。

〈SK-32〉

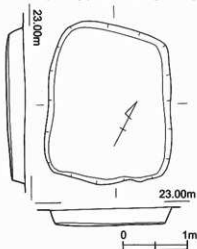
SD-11（内濠）内において検出した、いわゆるA群の貯蔵穴である。長軸を北西にとり、長軸長2.46m、短軸長1.88m、深さ0.28mを測る。平面プランは長方形である。



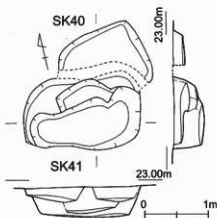
第17図 SK-25 [1/60]



第18図 SK-26 [1/60]



第19図 SK-32 [1/60]



第20図 SK-40、41 [1/60]

〈SK-40〉

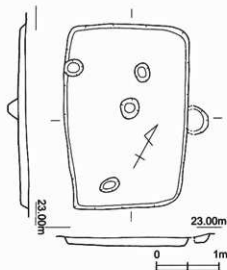
A群に属するもので、貯蔵穴として扱う事にはやや疑問が残る。遺構の半分近くをSK-41に切られている為、詳細は不明だが、長軸を北東にとり、長軸長1.36m以上、短軸長1.08m以上、深さ0.28mを測る。床面はおおむねフラットである。

〈SK-41〉

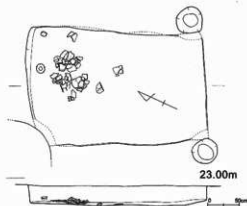
SD-11（内濠）内、いわゆるA群の貯蔵穴である。長軸を東西にとり、長軸長1.84m、短軸長1.10m、深さ0.48mを測る。菱形土器の口縁に刻目が施文されるものと施文されないものが共伴し、又、SB-14の一部を切っているところから、弥生前期末から中期初頭の時期が考えられ、非常に興味深い。

〈一口メモ〉 貯蔵穴

弥生の社会では、農業の技術や生産量の向上も非常に大切でしたが、食物を貯蔵する方法にも色々工夫がなされました。貯蔵穴もその工夫の中の1つで、地面深くに坑を掘り稲穂を雑然と積んだり、甕や壺の中に食物を入れ保存していたようです。貯蔵穴は大変深く、梯子がないと昇り降り出来ない程です。弥生時代の人達が生活していた当時は、穴の上に屋根をかけて、雨や日差しから食物を守っていたのでしよう。



第21図 SK-51 [1/60]



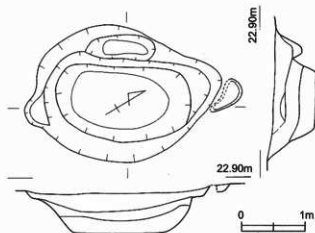
第22図 SK-52 [1/60]

〈SK-51〉

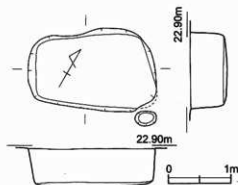
A群内において検出した貯蔵穴である。長軸を北北西にとり、長軸長2.9m、短軸長2.0m、深さ0.12mを測る。中央部に柱穴を1つ確認したが、覆屋根を支える柱であったか否かは不明。やや大きめの長方形プランで、壁面は垂直に立ち、床面はフラットである。隣接するSK-52を切る。弥生時代前期後半頃か。

〈SK-52〉

A群内において検出した貯蔵穴である。長軸を北北西にとり、長軸長2.82m、短軸長1.75m、深さ0.3mを測る。坑外の各コーナー部にそれぞれ柱穴を確認した。位置、規模等からみても、貯蔵穴に伴う施設と考えられ、覆屋の存在が推定出来るが、柱穴の時期が確定出来ず、確実性には欠けている。SK-51と同様、やや大きめの長方形プランで、壁面は垂直に立ち、床面はフラットに仕上げられている。床面直上からは、刻目突帯文系で胴部が「く」の字形に曲折するタイプや、やや丸味を帯びた砲弾形のプロポーションを持つ甕形土器が、また、口縁部が強く外反し、肩部に明瞭な段の入る甕形土器が数個体出土した。二重環漆が掘削され



第23図 SK-62 [1/60]



第24図 SK-64 [1/60]

た理由や、その時期について知る上で、1つの手掛りになるものと思われる。

〈SK-62〉

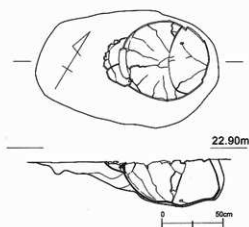
調査区中央部、いわゆるC群内において検出した貯蔵穴である。長軸を北東にとり、長軸長2.90m、短軸長2.14m、深さ0.64mを測る。平面プランは楕円形で、壁面は若干摺鉢状になっている。北西の壁面途中には一段テラスが存在し、これが貯蔵穴使用時の昇降段になっていたものと思われる。貯蔵穴内では、多量の刻目突帯文系の土器が出土した。甕形土器では、突帯の位置が口縁端部よりわずかに下ったものが主体を成し、壺形土器においては、口縁部がやや短かく強めに外反し、頸部はやや直線的に下り、肩部との境に篋状工具で沈線を入れるものが主流となっている。現在でも1つの土器形式中の1タイプとして捉えられている「亀ノ甲タイプ」の土器に、若干先行すると思われるものが八女市内においてもまとまった形で確認出来た事で、弥生時代前期の刻目突帯文系土器の分布の中心をもつ有明海北岸地域の桃相と照らしあわせながら、従来の亀ノ甲タイプの土器について、改めて再検討する必要性が出て来たのではないと思う。

〈SK-64〉

調査区中央部、いわゆるC群内において検出した貯蔵穴である。長軸を北東にとり、長軸長2.0m、短軸長1.2m、深さ0.6mを測る。平面プランはやや小型の長方形プランで、壁面はオーバーハングせずに、垂直に立っている。SK-62同様、貯蔵穴内より多量の土器が出土したが、SK-62出土遺物より若干後出するようである。



第25図 SK-82 [1/30]



第26図 SK-85 (K-1) [1/30]

〈SK-82〉

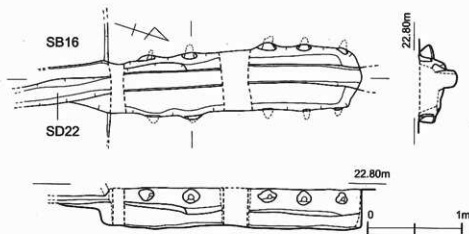
調査区中央部のやや南側で検出した土壌である。長軸を北西にとり、長軸長1.28m、短軸長1.10m、深さ0.36mを測る。土壌の断面はやや特徴的な形態をしており、南辺壁面はゆるやかに床面に向かって傾斜しているが、北辺壁面はほぼ垂直に落ち、一部はオーバーハングしている。土層断面を観察すると、板状の有機物が存在していたと思われる黒色土層が横たわり、又、土壌床面より扁平の磨製石鏃が出土した事から、木蓋土壌墓と判断した。類例は八女市内においても大字吉田字辻ノ西所在の辻ノ西遺跡等にもあるが、詳細に検討すれば、まだまだ類例は増加するものと思われる。

〈SK-85〉

調査区中央部南側で検出した甕棺墓である。主軸を南西にとり、掘り方は楕円形で、直径1.47m、短径0.92mを測る。上半部は削平され遺存状態は良くない。やや角度をもって墓床底に接する形で埋置されている。下甕の最下部に水抜き穴が一孔うがたれている。弥生時代中期中頃のものと思われる。

〈SK-96〉

調査区南西部において検出した土壌である。長軸を北北西にとり、長軸長3.14m、短軸長0.62m、深さ0.2mを測る。土壌内の東西壁面に6対の計12個の小横穴を検出した。丸木棒等を差し込み、横渡し状態にしていたものと思われるが、用途は判然としない。SB-16同様、土壌掘削後の床面整形の段階で、切り込んでいるSD-22上に黄色粘質土で覆っている。土壌の性格上、湿気を嫌ったか、圧沈を防いだのか定かではないが、この土壌の使用意図を考える上で、重要な要素となるであろう。土壌の南端部は、SB-16によって切られてはいるが、その位置関係や整地方法の類似性から、何らかの関係が伺える。



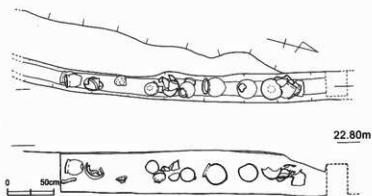
第27図 SK-96 [1/40]

4. 溝 (SD)

弥生時代から古墳時代にかけての溝を、自然流路 (SD-01) を含め19条検出した。(環濠であるSD-10とSD-11は含めていない。) その大半は、水田経営に係る用排水路の施設と思われるが、SD-02やSD-22などは、その形態や出土状況から、一概に用排水路であると認定し難い要素を含んでいる。

〈SD-22〉

調査区南西部において検出した溝である。主軸を北北西にとり、検出長21m、幅は上底で0.25m、下底で0.15mを測る。SD-05との接続部付近で、3m程の間に多量の土器が出土した。内訳は、甕形・壺形土器が7個体、底部に突孔のある鉢形土器が1個体、高坏が1個体である。基本的に口縁部が全て上を向き、比較的安定感のある状態で出土していた為、廃棄されたものではなく、何らかの行為の為に、又は、その直後に埋置されたものと考えられる。



第28図 SD-22 [1/40]



SD-11 (内濠) 断面に立ってみると

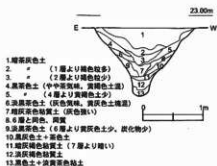
5. 環濠

〈SD-10〉

調査区東部に長さ87mの溝を検出した。断面形がV字、または逆台形を呈す大溝である。後世の削平は受けているものの、遺存状況は極めて良好で、平面は北から南に向けて緩やかな弧を描いている。溝の構造、及び、規模は調査区内においても微妙に変化しており、北側では溝上面幅2.40m、底面幅0.8m、深さ1.15mを測り、西側では溝上面幅2.20m、底面幅0.6m、深さ1.0m、南側では溝上面幅1.80m、底面幅0.15m、深さ1.10mを測る。溝上面幅が南に向かうほど狭くなってゆくのは、微高地上の南側斜面に向かって掘削された為と思われる。深さについては、部位により深さ1.50mになるなど一定していないが、これは基盤土下に礫層（玉石層）があった為と思われる。当初、V字溝を意図し掘削を進めていく課程で礫層にあたり、部分的ではあるが、V字掘削を断念した様子が伺い知れる。溝内埋土の状況により、上層、中層、下層に分けて遺物の取り上げを行った。厳密な層位的取り上げではないので、若干不安が残るが、上層より弥生時代中期後半を中心とした遺物が出土した。土器群の他、北側において焼土壁壺や小型の有袋鉄斧、砥石等が出土した。中層より弥生時代中期前半から中頃の遺物が出土。下層より刻目突帯文系の土器、いわゆる「亀ノ甲タイプ」の変形土器が出土した。主に弥生時代前期後半を中心とする土器群である。

〈SD-11〉

調査区東部に、SD-10と平行してその東内側に長さ61mの溝を検出した。断面形は逆台形を呈す大溝である。SD-10同様、後世の削平は受けているものの、遺存状況は極めて良好で、平面は北から南に向けて緩やかな弧を描いている。溝の構造、及び、規模はSD-10に比べあまり大きな変化は認められない。北側での溝上面幅5.40m、底面幅2.20m、深さ1.30mを測り、西側では溝上面幅4.60m、底面幅1.80m、深さ1.15m、南側で、



第29図 SD-10土層断面 (1/60)

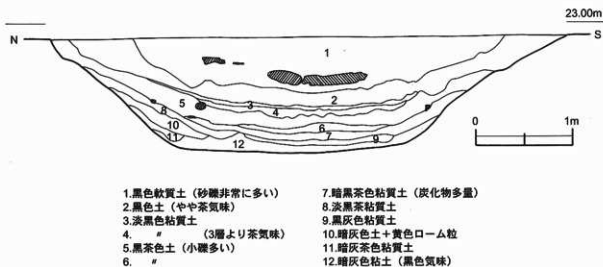


第30図 SD-10土層断面 (1/60)

0m、深さ1.20mを測る。SD-10同様、床面にはほぼ全域に渡って礫層が露出している。しかし、良く観察してみると、礫層も一部掘り込まれた跡がある事から、当初はV字溝を意図しつつ掘削を行ったものと思われる。SD-11においても、埋土の状況から上層、中層、下層に分け、遺物の取り上げを行った。層位的取り上げではないが、厳密性にやや欠ける感はぬぐいきれない。しかし、下層出土の遺物は、基本的にSD-10下層出土遺物とほとんど変化は認められない。



第31図 SD-11土層断面 (1/40)



第32図 SD-11土層断面 (1/40)

IV. まとめ

今回の調査で検出された弥生時代前期の環濠は、福岡県南部地区の八女地方においては3例目¹⁴⁾で、二重環濠という事となれば、福岡県南部のみならず、九州地区内においても2例目¹⁵⁾となる、貴重な成果であった。

今回検出した環濠は円形、または、楕円形のプランを呈するであろう二重の濠をもつが、その同時性が問題となる。SD-10とSD-11とのスパンは、検出北側部分で約7.5m、西側部分で約8.60m、南側部分で約9.0mを測る。南に下るとスパンが長くなるようであるが、微高地の南辺を下るように掘削されたものと解すると、後世の削平による視覚的な広がりにはすぎない事がわかる。また、SD-10とSD-11の間には、切り合い関係にある遺構を除けば、弥生時代に属する独立した遺構はほぼ存在せず、わずかに溝の縁辺に柱穴が存在するのみである。これは当初より規格性のある土地区画を行った故の結果であり、SD-10の外縁より外側には、数多くの遺構が存在している事から、単なる偶然性が左右したものではない事がわかる。決定的なのは、SD-10、SD-11の両溝下層より出土する遺物に、ほとんど形式差が認められない事である。甕形土器については、亀ノ甲タイプの刻目突帯文系土器は、全て口縁端に浅い刻目突帯が付き、口縁は水平、または、やや下り気味のものが主流である。胴部突帯が付くタイプと付かないタイプがあるが、共に刻目は浅目である。器面調整はナデ調整が主流を成す。板付系や折衷系の如意口縁をもつ甕形土器もあるが、個体数は少ない。壺形土器は、肩部の沈線や段が不明瞭になりつつあり、器面調整もミガキが少なくなる。口縁内外面に肥厚させる板付系のものも見られるが、個体数は非常に少ない。このような特徴を兼ね備えた土器が両溝より確認出来る。

以上の事から、二本の溝が偶然に、または、前後して掘削されたことは考えにくく、同時に規格設計され、掘削された二重の環濠であったと考えられる。この判断に基づき、SD-10を外濠、SD-11を内濠とする事とした。次に、その性格であるが、従来、該期のものとして検出された環濠としては、宗像市所在の光岡長尾遺跡（一重環濠）や、小郡市所在の横隈北田遺跡（一重環濠）、苅田町所在の葛川遺跡（一重環濠）等が挙げられる。これらの環濠には、基本的に貯蔵穴のみが検出され、同時期における住居跡等の遺構は認められていない。この事から、該期の環濠の性格として、貯蔵穴専用環濠としての性格が付与されているようである。しかし、今回検出された環濠は規模もさる事ながら、二重で取り囲んでいる事や、内濠内に該期前後の掘立柱建物4棟確認されている事などからみて、従来の考えに一考をうながす必要性を示唆している。吉留秀敏氏は、論¹⁶⁾の中で「該期の北部九州の環濠には集落を囲むものと、貯蔵穴を囲むものの二種類があると予想される。」と言われている。立野・大坪遺跡の二重環濠がそのどちらに属するかは、現在では判定できないが、環濠とはほぼ同時期にあたると思われるSK-75やSK-95などの貯蔵穴や、SB-18やSB-19などの掘立柱建物（倉庫？）が環濠の外側に位置している事などから、内濠内部には特定の拠点施設が存在する可能性も否定出来ない。ただ、福岡市所在の那珂遺跡37次調査地点の二重環濠（縄文時代晩期。福岡市埋蔵文化財調査報告書第366集）の形態とは逆の、外濠が小さく、内濠の規模が大きくな事が気になる。これは、外敵からの防禦を主目的とせず、農業の生産性の発達を目的とした共同体内部の結束を重視した結果なのであろうか。または、地域農業協同体内に、既に顕著な階層分化が始まっている事を示すものだろうか。御批判を賜りたい。

今後は、周辺地区の調査を含めた、二重環濠の存在意義に関し解明を進めたい。

末筆ではありますが、調査等にあたり、下記の方々には大変有意義な御教示、御指導、御援助を賜りました。記して謝意を表します。(敬称略・順不同)

武末純一(福岡大学人文学部助教授)、吉留秀敏(福岡市教育委員会)、山村信榮(太宰府市教育委員会)、新原正典、伊崎俊秋(福岡県教育委員会)、片岡宏二(小郡市教育委員会) 白木守(久留米市教育委員会)、田中康信(瀬高町教育委員会)、尾崎源太郎(広川町教育委員会)、大島真一郎(黒木町教育委員会)。

筑後市教育委員会の小林勇作氏と柴田剛氏には、格段の御配慮を得た。重ねて謝意を表したい。

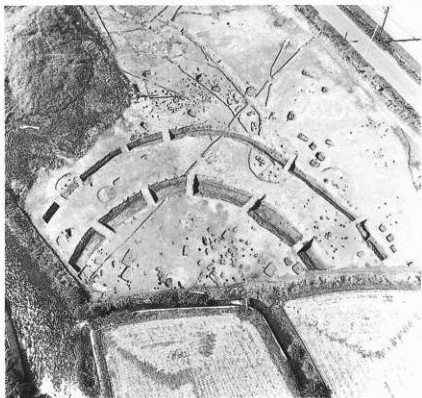
最後に、真夏の暑い日差しの中、頑張って環濠を掘ってくれた作業員さん、出土した土器の復元作業や土器の実測、図版等の整理や浄書をしていただいた作業員さん、遺物観察表の作成に協力していただいた荒尾淳子、山本義輝の両氏。そして、この遺跡に携わった全ての方々に感謝いたします。

- (1). 1 例目は八女市大字室岡所在の「亀ノ甲遺跡」、2 例目は八女市大字緒玉所在の「宿町遺跡」、3 例目は今回検出分である。
- (2). 1 例目は、福岡市博多区所在の「那珂遺跡-37次調査-」である。縄文時代晩期に属すると報告されている。
2 例目は今回検出分。
- (3). 「環濠集落の成立とその背景」 吉留秀敏
古文化談叢 第33集
(九州古文化研究会 発刊)

〔図版〕

図版 1

立野・大坪遺跡全景（東より）



図版 2

二重環濠全景



図版3 二重環濠検出状況（南より）



図版4 SD-10（外濠）推積状況（西より）



図版5 SD-11（内濠）推積状況（南より）



図版 6 二重環濠調査風景 (北より)



図版 7 SD-10 (外濠) 断面状況



図版 8 SB-09 (東より)



図版 9 SB-16 (西より)



図版 10 SB-11 (北西より)



図版 11 SB-12 (手前)、SB-14 (奥) (西より)



図版 12 SK-62 (北東より)



図版 13 SK-52遺物出土状況 (南より)



図版 14 SK-52完堀状況 (北より)



図版 15 SK-82堆積状況（東より）

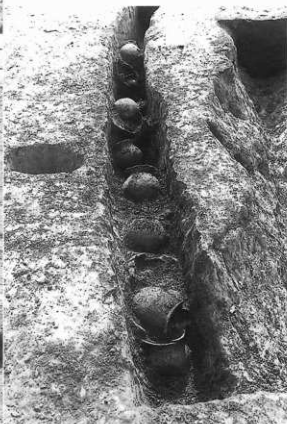


図版 16 SK-85〈塞棺〉検出状況（北西より）



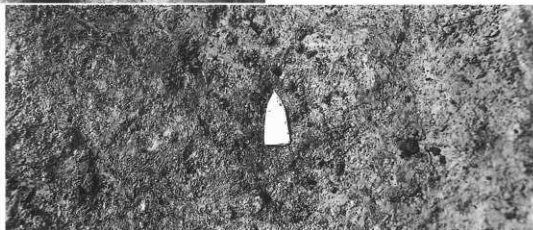
図版 17 SK-96（北西より）

図版 18 SD-05、22 (北より)



図版 19 SD-22遺物出土状況 (北より)

図版 20 SK-82石鏃出土状況





圖版 21 SD-10 (外濠) 鉄斧出土状況



圖版 22 SD-10 (外濠) 鉄器出土状況

遺物観察表 1

出土番号	番号	器 類	層 位	口 径	底 径	器 高	所 見
SD-10	1	甕	——	23cm	——	——	外面 ハケ後ナデ 内面 ハケ後ナデ つまみ出し突帯 外面 淡黒茶色 内面 黒色 胎土は砂粒多く荒い
SD-10	2	甕	下 層	26cm	——	——	外面ハケ 内面ナデ 刻目浅い 胴部突帯有 外面 淡黄褐色 内面 淡黄褐色
SD-10	3	甕	下 層	——	——	——	外面ナデ 内面不明 刻目浅い 外面 黒茶色 内面 淡茶色
SD-10	4	甕(底部)	下 層	——	7cm	——	外面ハケ 内面不明 底部ナデ 外面 淡茶褐色 内面 淡茶色
SD-10	5	甕(底部)	下 層	——	7cm	——	外面 指オサエ後ナデ 内面 指オサエ後ナデ 底部ナデ 外面 暗褐色 内面 黒茶色 やや上蓋
SD-10	6	甕	下 層	——	12cm	——	内面ナデ? 底部 オサエ後ナデ 外面 黒茶色 内面 淡茶色
SD-10	7	甕	下 層	——	8cm	——	内外面 ミガキ後ナデ?
SD-10	8	甕	下 層	——	6.5cm	——	外面 ハケ後ミガキ有 内面 ヘラ状工具でのナデ後ミガキ有 外面 暗褐色 内面 暗黄褐色
SD-10	9	甕	下 層	14cm	——	——	外面 ハケ後ミガキ 内面 ハケ後ナデ? 外面 灰褐色 内面 暗黄褐色 黒斑あり
SD-10	10	甕	下 層	13cm	——	——	——
SD-10	11	鉢	下 層	19.5cm	7cm	8.5cm	外面 ミガキ 内面 ハケ後ナデ 外面 暗茶色 内 暗茶褐色 黒斑有
SD-11	1	甕	下 層	22cm	——	——	口縁ナデ 内外面 暗茶灰色
SD-11	2	甕	下 層	19.5cm	——	——	内外面ハケ後一部ナデ 内外面 淡黒灰色
SD-11	3	甕	下 層	24cm	——	——	内外面ハケ後一部ナデ 刻目浅い 外面 黒茶色 内面 茶褐色
SD-11	4	甕	下 層	21.5cm	——	——	内外面ナデ 刻目浅い 外面 暗茶色 内面 褐色
SD-11	5	甕	下 層	25cm	——	——	外面後ナデ 口縁ナデ 外面 暗茶褐色 内面 暗茶色
SD-11	6	甕	下 層	26.5cm	——	——	外面ハケ 内面 オサエ後ヨコナデ 口縁部ナデ 外面 暗茶褐色 内面 淡茶灰色 刻目浅い
SD-11	7	甕(口縁部)	下 層	31.5cm	——	——	外面ナデ 内面は不明 刻目は浅い
SD-11	8	甕	下 層	20cm	——	——	外面ハケ後ナデ 内面 オサエ後ナデ 口縁ナデ 外面 淡黒茶色 内面 暗茶 刻目浅い
SD-11	9	甕	下 層	——	20cm	——	底部はナデ 体部はヘラ状工具による荒いナデ 底部はオサエ後ナデ 外面 茶褐色 内面 黒色
SD-11	10	甕	下 層	——	7.5cm	——	外面底部はオサエ後ナデ 体部はナデ 内面 タテハケ後ナデ 外面 暗褐色 内面 暗茶色
SD-11	11	甕	下 層	——	8cm	——	外面 タテハケ後ナデ 底部 オサエ後ナデ 内面 タテハケ後ナデ 外面 暗褐色 内面 暗茶色
SD-11	12	甕	下 層	15.5cm	——	——	外面 ナデ後ミガキ 内面 タテハケ後ミガキ 口縁ナデ 外 暗茶色 内 暗黄茶色
SD-11	13	甕	下 層	17.5cm	——	——	外面ミガキ 内面ナデ 口縁ナデ 外面 暗茶褐色 内面 白灰色
SD-11	14	甕	下 層	17.5cm	7cm	24.5cm	内外面表面不明 口縁ナデ 外面 暗茶褐色 内面 白灰色
SD-11	15	甕	下 層	——	10cm	——	外面ミガキ 内面ハケ後ナデ 底部ナデ 外面 暗茶色 内面 淡茶色 黒斑有
SD-11	16	鉢(口縁部)	下 層	28cm	——	——	外面ミガキ後ナデ 内面ナデ 外面に黒色物 内面暗褐色 外面暗茶褐色 内面暗褐色
SK-25	1	甕	上 層	25.5cm	——	——	外面ナデ 外面 暗茶色 内面 淡褐色
SK-25	2	甕	下 層	25cm	——	——	外面ナデ 口縁ナデ 外面 暗茶褐色 内面 淡茶色 黒斑有

遺物観察表 2

出土番号	番号	器 類	層 位	口 径	底 径	器 高	所 見
SK-25	3	甕	下 層	22.5cm	——	——	外面ヨコハケ後ナデ 内面 押え後ナデ? 口縁部ナデ 外面 黒茶色 内面 淡褐色
SK-25	4	甕	上 層	25.5cm	——	——	内外面 淡茶色
SK-25	5	甕	下 層	19.5cm	——	——	外面ハケ?後ナデ 内面ナデ 外面 暗茶色 内面 淡黄灰色
SK-25	6	甕	上 層	19cm	——	——	内面ナデ? 外面 暗赤褐色 内面 黒灰色~茶褐色
SK-25	7	甕	——	15.5cm	——	——	外面ナデ 内外面 黄褐色
SK-25	8	壺	下 層	——	8cm	——	外面 ナメハケ後ナデ? 内面ミガキ? 外面 暗黄灰色 内面 黒茶色
SK-25	9	甕	下 層	——	7.5cm	——	内面ナデ? 底部外面から内面に向けて焼成後突孔 内外面 淡茶灰色
SK-26	1	甕	——	18.5cm	——	——	外面ナデ 内面に黒斑有 内外面 淡茶灰色
SK-26	2	甕	——	19cm	——	——	内外面ナデ 外面に黒斑 内外面 白黄色
SK-26	3	甕	——	21cm	——	——	外面ナデ (一部ヨコハケ有) 内面押え後ナデ 内外面 淡黄茶色
SK-51	1	甕	——	18cm	——	——	外面ナデ 内面 丁寧なナデ 口縁部ナデ 外面 暗茶赤褐色 内面 暗茶褐色
SK-52	1	甕	——	22cm	——	——	内外面ナデ 外面 暗赤褐色 内面 赤褐色
SK-52	2	甕	——	19.5cm	——	——	外面タテ方向のナデ 内面押え後ナデ 口縁ナデ 外面 暗茶灰色 内面 暗褐色 口縁部にコグツキ
SK-52	3	甕	——	19cm	——	——	外面ナデ 内面ナデ 口縁はやや広いナデ 外面 黒茶色 内面 淡茶褐色
SK-52	4	甕	——	22.5cm	——	——	外面 タテ方向のナデ 内面 指押えナデ 口縁ナデ 外面 暗茶褐色~黒茶色 内面 淡茶褐色
SK-52	5	甕	——	23cm	9cm	33cm	外面 上半ナデ 下半 丁寧なナデ 内面 ナデ? 口縁部 ナデ 外面 濃茶色 内面 淡茶灰色 内外面 黒斑有
SK-52	6	甕	——	——	7cm	——	内外面 押え後ナデ? 内外面 淡褐色
SK-52	7	甕	——	——	8.5cm	——	外面 丁寧なナデ 内面 押え後丁寧なナデ 外面 淡茶灰色 内面 淡灰色
SK-52	8	甕	——	——	7.5cm	——	外面ナデ 内面ナデ? 外面 褐色 内面 淡茶褐色
SK-52	9	甕	——	8.5cm	25.5cm	11cm	底部外面ナデ ツマミ部押え後ナデ 内面ナデ 外面 濃茶色 内面 淡白黄色 内面は黒色化している
SK-52	10	壺	——	14cm	——	——	外面ミガキ?後ナデ 内面ミガキ?後ナデ 口縁部ナデ 内外面 黄褐色
SK-64	1	甕	——	——	——	——	口縁部ナデ 外面 黒褐色 内面 黄褐色
SK-64	2	甕	——	——	——	——	内外面 黄褐色 胎土は若い
SK-64	3	壺	——	8cm	——	——	
SK-64	4	甕	——	——	7.5cm	——	
SK-62	1	甕	下 層	21cm	——	——	外面ナデ 内面ナデ? 外面 黒灰色 内面 暗茶灰色
SK-62	2	甕	下 層	22cm	——	——	外面ナデ 内面若いナメハケ 口縁部ナデ 外面 暗褐色 内面 暗茶褐色
SK-62	3	甕	下 層	22.5cm	——	——	外面ナデ 内面 ナメハケ目 外面 暗茶灰色 内面 黄褐色~暗茶色
SK-62	4	甕	下 層	24cm	——	——	外面ナデ 内面 目指ナデ?後ナデ

遺物観察表 3

出土番号	番号	種類	層位	口 径	底 径	器 高	所 見
SK-62	5	壺	上 層	32cm	——	——	内外面 荒いナデ 内外面 淡黄褐色
SK-62	6	壺	下 層	20.5cm	——	——	外面 荒いナデ 内面 指押え後ナデ 内外面 淡黄褐色
SK-62	7	壺	——	——	7cm	——	外面 丁寧なナデ 内面 ナデ後ミガキ 内面に炭化したコゲツキ有 外面 暗褐色 内面 淡灰褐色
SK-62	8	壺	下 層	——	7cm	——	内外面 荒いナデ 底部ナデ 外面 暗褐色 内面 淡灰褐色
SK-62	9	壺	上 層	——	6cm	——	——
SK-62	10	壺	上 層	——	8cm	——	外面 オツ工後ナデ？ 内面ナデ 外面 暗褐色 内面 暗茶褐色
SK-62	11	壺	下 層	——	——	——	外面ナデ 内面 指押え後ナデ 刻目はナデ後に入れる 外面 暗黄褐色 内面 淡黄褐色
SK-62	12	小型壺	上 層	7cm	4.5cm	5cm	外面下部に装飾線 内外面丁寧なナデ、底部ナデ 外面 暗茶褐色 内面 黄褐色
SK-62	13	高坏	下 層	——	——	——	——
SK-62	14	甗	上 層	——	7.5cm	——	内外面ナデ 底部外面より内面にむけて焼成後に貫孔 底部肩部は押え後ナデ 外面 黄褐色 内面 暗茶褐色
SK-62	15	甗	下 層	——	7.5cm	——	外面ナデ？ 内面ナデ 底部外面より内面にむけて焼成後に貫孔 外面 黄色 内面 茶褐色
SK-62	16	壺	下 層	12cm	——	——	口縁部ナデ？ 内外面 淡黄褐色
SK-62	17	壺	下 層	18.5cm	——	——	外面ミガキ 内面 押え後ナデ 口縁部ナデ 外面 暗褐色 内面 暗茶褐色
SK-62	18	壺	下 層	14cm	——	——	——
SK-62	19	壺	下 層	14cm	——	——	外面ナデ 口縁下略に配厚 内外面 淡黄褐色
SK-62	20	壺	下 層	——	8cm	——	外面ミガキ？ 内面ナデ？ 外面 暗灰褐色 内面 暗灰褐色
SK-62	21	壺	下 層	——	8.5cm	——	外面ミガキ 黒斑有 内外面 淡黄褐色
SK-62	22	壺	上 層	22cm	——	——	外面ナデ 内面 荒いナデ 外面 灰褐色 内面 黄褐色
SK-62	27	鉢	下 層	31cm	——	——	外面ナデ後ミガキ？ 内面ナデ 口縁部ナデ 実帯下に装飾線状の沈線 外面 黄茶褐色 内面 暗茶褐色
SK-62	23	壺	上 層	21.5cm	——	——	外面ナデ 内面ナデ？ 内外面 暗黄褐色
SK-62	24	壺	下 層	25.3cm	——	——	外面ナデ 内外面 白黄色
SK-62	25	壺	——	24cm	——	——	外面ナデ 内面押え後ナデ 口縁ナデ 内外面 淡茶褐色
SK-62	26	壺	下 層	15.4cm	——	——	内外面ナデ 内外面 暗茶褐色
SK-62	28	壺	上 層	20cm	——	——	外面ヨコハケ？ 内面ナデ 外面に炭化したコゲツキ有 外面 淡黄褐色 内面 暗灰褐色
SK-62	29	鉢	下 層	17.6cm	——	——	内外面ナデ 内外面 茶褐色
SK-62	30	鉢	下 層	18cm	——	——	外面上半ナデ 下半ミガキ 内面上半ナデ、下半ミガキ 内外面 黄茶褐色
SK-62	31	壺	下 層	——	——	——	内面ハケ？ 内外面 淡黄褐色
SK-62	32	壺	下 層	——	——	——	外面ナデ 内外面 暗茶褐色
SK-62	33	壺	上 層	——	——	——	外面ナデ 内面ナメハケ 外面 暗茶褐色 内面 暗茶褐色

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさがいほう						
書名	埋蔵文化財調査概報 IV						
福書名	福岡県八女市大字立野所在遺跡の調査概報						
巻次	第4分冊						
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第48集						
編著者名	大塚恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834 福岡県八女市大字本町647 TEL 0943-23-1111						
発行年月日	1997年(平成9年)3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村: 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たての あざのつば 立野・大坪遺跡	ふくおかけん 福岡県 やめしおおあざ 八女市大字 たてのあざおおつば 立野字大坪	402109	33 1207	130 3237	19960404～ 19970131	7,200㎡	平成8年度 県営農村 活性化住環 境整備事業 による事業 地の掘削
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
立野・大坪遺跡	集落跡	弥生時代前期 から 古墳時代前期	二重環濠、堀立柱建物 円形竪穴住居、貯蔵穴 木棺墓、木蓋土槨墓 甕棺墓、自然河川、溝 方形竪穴住居、柱穴	弥生時代前期の 刻目突帯文系土器 その他弥生式土器 石包丁、石鏃、鉄器 管玉、土製紡錘車 石製紡錘車、土製投弾 焼土壁塊、土師器	縄文時代晩期から 弥生時代前期にか けて、九州地区で は2例目となる 二重環濠の検出		

埋蔵文化財調査概報Ⅳ
八女市文化財調査報告書

第 48 集

平成9年3月31日

発 行 八 女 市 教 育 委 員 会
八 女 市 大 字 本 町 6 4 7
印 刷 (資) 東 兄 弟 印 刷 所
八 女 市 大 字 祈 禱 院 5 6 3